



Oracle のインストール

この章では、Oracle データベースのインストールおよび設定について説明します。

- [Oracle データベースのインストール \(1 ページ\)](#)
- [新しいデータベース インスタンスの作成 \(3 ページ\)](#)

Oracle データベースのインストール

始める前に

- シスコは、Oracle DBA が Oracle サーバをインストールすることを推奨します。
- 既知の Oracle 不具合 (ORA-22275) のパッチを更新する必要があります。これが行われない場合、永続的なチャットルームは正常に動作しません。
- Oracle のマニュアルで Oracle データベースのセキュリティの推奨事項をご覧ください。
- サポートされているバージョンの詳細については、[外部データベースの設定の要件](#)を参照してください。
- Oracle バージョン11以前では、UTF8 文字エンコーディングを使用するように Oracle データベースを設定する必要があります。
- Oracle バージョン12では、UTF8が予期しない動作につながる可能性があるため、AL32UTF8 文字エンコーディングを使用するように Oracle データベースを設定する必要があります。たとえば、Oracle 12 で UTF8 を使用する場合、Cisco XCP Text 会議マネージャサービスを再起動するとチャットルームが削除されることがあります。
- Oracle データベースをインストールするには、Oracle のマニュアルを参照してください。

テーブルスペースとデータベースユーザを作成するには、次のように sysdba として Oracle データベースに接続します。

```
sqlplus / as sysdba
```

ステップ 1 テーブルスペースを作成します。

(注) **CREATE TABLESPACE** コマンドの **DATAFILE** キーワードは、テーブルスペースのデータファイルの配置場所を Oracle に通知します。

a) 次のコマンドを入力します。

```
CREATE TABLESPACE tablespace_name DATAFILE
'absolute_path_to_oracle_installation\oradata\database_name\datafile.dbf' SIZE 100M AUTOEXTEND
ON NEXT 1M MAXSIZE UNLIMITED LOGGING EXTENT MANAGEMENT LOCAL SEGMENT SPACE MANAGEMENT AUTO;
```

- *tablespace_name* を、テーブルスペースの名前で置き換えます。
- *absolute_path_to_oracle_installation* を、Oracle がインストールされている場所への絶対パスで置き換えます。*datafile.dbf* を含むパス全体を、単一引用符で囲みます。
- *database_name* を、データベース フォルダの名前で置き換えます。
- *datafile.dbf* は *\oradata* の下のフォルダ内で作成する必要があります。この場合は *database_name* フォルダです。
- *datafile.dbf* を、作成するデータ ファイルの名前で置き換えます。

ステップ 2 データベース ユーザを作成します。

```
CREATE USER user_name IDENTIFIED BY "new_user's_password" DEFAULT TABLESPACE tablespace_name TEMPORARY
TABLESPACE "TEMP" QUOTA UNLIMITED ON tablespace_name ACCOUNT UNLOCK;
```

- *user_name* を、新しいユーザのユーザ名で置き換えます。
- (注) **CREATE USER** *user_name* コマンドでは、二重引用符がないとデフォルトの大文字になり、引用符があると大文字と小文字が区別されます。
- "*new_user's_password*" を、新しいユーザのパスワードで置き換えます。
- 重要** *new_user's_password* を二重引用符で囲むことで、その変数は大文字と小文字が区別されます。デフォルトでは、SQL の ID は大文字と小文字が区別されません。
- *tablespace_name* を、テーブルスペースの名前で置き換えます。

ステップ 3 データベース ユーザに権限を付与します。

次に、スキーマを作成またはアップグレードするために必要なデータベースユーザに必要な権限と権限を付与する例を示します。

(注) アップグレードの前に、すべての IM and プレゼンスサービスサービスがアップグレード後も通常どおりに動作するように、これらの権限と権限が付与されていることを確認する必要があります。

- **GRANT CREATE SESSION TO** *user_name*;
- **GRANT CREATE TABLE TO** *user_name*;
- **GRANT CREATE PROCEDURE TO** *user_name*;
- **GRANT CREATE TRIGGER TO** *user_name*;

スキーマを作成またはアップグレードした後、より大きなアクセス制御が必要な場合は、次の権限を取り消すことができます。

(注) アップグレードする前に、取り消された権限が再度付与されていることを確認します。

- **User_name**からテーブルの作成を取り消します。
- **User_name**からの作成手順を取り消します。
- **User_name**からトリガーの作成を取り消します。

(注) IM およびプレゼンスサービスでは、通常の操作のセッションの作成権限のみが必要です。

関連トピック

[Oracle のマニュアル](#)

新しいデータベース インスタンスの作成

- ステップ 1** `dbca` コマンドを入力します。
[Database Configuration Assistant (データベース設定補助)] ウィザードが開きます。
- ステップ 2** [次へ (Next)] をクリックします。
[Operations (操作)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 3** **[Create a Database (データベースの作成)]** オプション ボタンをクリックし、**[Next (次へ)]** をクリックします。
[Database Templates (データベース テンプレート)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 4** **[General Purpose or Transaction Processing (汎用またはトランザクション処理)]** オプション ボタンをクリックし、**[Next (次へ)]** をクリックします。
[Database Identification (データベースの識別)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 5** この画面で一意のグローバル データベース名を入力し、データベースの一意の Oracle System Identifier (SID) も入力して、[次へ (Next)] をクリックします。

(注) ステップ 15 で必要になるため、SID をメモしておいてください。
[管理オプション (Management Options)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 6** **[Enterprise Manager (エンタープライズ マネージャ)]** タブでは、必要な設定がデフォルトで有効になっていますが、バックアップとアラートの通知をオプションで設定できます。[次へ (Next)] をクリックします。
[Database Credentials (データベースの資格情報)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 7** そのウィンドウには、データベース ユーザのパスワード認証を設定する 2 つのオプションがあります。どちらかを選択し、**[Next (次へ)]** をクリックします。
[Database File Locations (データベース ファイルの場所)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 8** **[Storage Type (ストレージタイプ)]** ドロップダウン リストは、インストールした Oracle と同じはずです。**[Use Oracle-Managed Files (Oracle 管理ファイルの使用)]** オプション ボタンをクリックし、**[Next (次へ)]** をクリックします。

(注) これは、他のデータベース インスタンスと同じフォルダに新しいデータベース インスタンスを作成します。
[Recovery Configuration (復元設定)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 9** デフォルト値のまま、**[Next (次へ)]** をクリックします。

[データベース コンテンツ (Database Content)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 10 (オプション) サンプルスキーマを有効にする場合はそのチェックボックスをオンにして、[次へ (Next)] をクリックします。

[初期化パラメータ (Initialization Parameters)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 11 [Memory (メモリ)] タブでは、データベース インスタンスのデフォルト値は 4GB のメモリとなっています。必要に応じて、これをより多くまたはより少なく設定できます。

(注) 使用するメモリ量は多すぎないように設定してください。多すぎると、その他のデータベース インスタンスでメモリが不足してしまいます。

ステップ 12 [Character Sets (文字セット)] タブで、[Use Unicode (Unicode の使用)] オプション ボタンをクリックし、[Next (次へ)] をクリックします。

[Database Storage (データベース ストレージ)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 13 デフォルト値のままにしておき、[Next (次へ)] をクリックします。

[Create Options (オプションの作成)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 14 [データベースの作成 (Create Database)] チェックボックスを選択し、[完了 (Finish)] をクリックします。

ステップ 15 新しいデータベースインスタンスが作成されたら、次のコマンドを実行することによって、Unix システム上の (ステップ 5 からの) ORACLE_SID 環境変数を一時的に変更する必要があります。

```
export ORACLE_SID=new_oracle_db_instance_sid
```

これで SID が変更され、sqlplus を使用してログインする際に、古いインスタンスではなく新しいインスタンスを使用することになります。その後に、[Oracle データベースのインストール \(1 ページ\)](#) で手順を繰り返すことができます。

これらの手順が完了したら、バッシュ プロファイルをソースとするか (バッシュ プロファイルに古い SID があることが前提) 、または SID を元の値に戻して export コマンド (ステップ 15) を実行することで、ORACLE_SID 環境変数を変更できます。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。